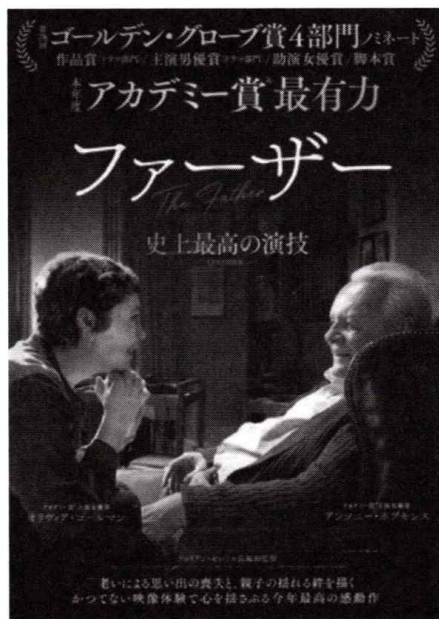


私事にわたるが、私の八七歳の母親は数年前に認知症を発症し、一年半前に高齢者施設に入った。さらに先月には脳出血を起こして救急搬送され、いま入院中である。幸い出血は軽度で収まり、今後は回復期リハビリテーション病院に転院することになる。まだ口の中の物を飲み下すことができないので経鼻栄養でしのいでいる。コロナで面会がかなわない。ようやく退院

ファーザー
(英仏・2020)



辞めさせてしまう。アンソニーの決まり文句は「腕時計が見当たらない。介護人が盗んだのだ」。これは認知症によくみられる症状だ。私の母親も入居した施設で「物を盗られた」と何度も大騒ぎして、私は手を焼かされた。

アンは新しい恋人とパリで生活することになったので、週末にしか会いに来られなくなると打ち明ける。アンはアンソニーを高齢者施設に入れるつもりでいる。一方、アンソニーはこの件を理解できず、頭の中は妄想が駆け巡る。寝室から居間に出ると見知らぬ男がお茶を飲んでいる。「アンはどこだ」と尋ねると、買い物に行っていて間もなく帰ってくるといわれる。帰宅したアンはまったくの別人だった。このシーンには、私もいったいどうなっているのかと一瞬戸惑った。やがて、アンソニー

となっても私のことを認識できるだろうか。ともあれ本作をみて、認知症の母親の脳裏に浮かんでいる光景をのぞいた気がした。

ロンドンで一人暮らしの八一歳のアンソニー(アンソニー・ホプキンス)は認知症を患っている。近所に住む長女のアン(オリヴィア・コールマン)は介護人をつける。だが、アンソニーはそのたびにすぐ介護人と衝突して介護人を

の頭の中を映し出していることがわかった。アンソニーの次女はかなり前に事故死した。しかし、アンに「ちっとも姿をみせない。画家だから世界中を旅して回っているのだろう」などという。アンはいたたまれない表情を浮かべて押し黙る。さらにアンソニーはアンと比較して次女を褒めちぎる。きょうだいを本人のいる前で比較するのは親として「禁じ手」だ。そんな

な気遣いすらできない。現実と仮構をアンソニーは往還する。アンは一〇年前に離婚したはずだが、アンはある男性と暮らしている。その男性から「われわれにいつまで迷惑をかけるのだ」となじられる。また、アンの新しい恋人からも同じことを問いつめられて頬を張られる。就寝中のアンソニーの首をアンが絞めて殺そうとするシーンもある。アンソニーの心の不安が投影されている。時間軸も行ったたり来たりする。繰り返しのシーンもある。もはやみている方にも現実と仮構の区別がつかなくなる。認知症を疑似体験しているようだ。実はこれが本作の裏テーマではないのか。

そして、ラストシーンでアンソニーは高齢者施設にいる。アンソニーの妄想の中でアンと名乗った女性はこの施設の看護師であり、パートナーだった男性は医師だった。アンソニーは母親を思い出して、その看護師の腕の中で泣き崩れてエンドとなる。

母親の主治医が、母親の状態を「ものごとを順序立てて考えられない」と説明してくれた。それはこういうことなのだと得心した。(二〇二二年六月二十七日・T.O.H.Oシネマズシヤンテ)

(にしかわ・しんいち/明治大学教授)